

氏名（本籍） クロダ タイスケ 黒田泰介（東京都）  
 学位の種類 博士（美術）  
 学位記番号 博美第78号  
 学位授与年月日 平成12年3月24日  
 学位論文等題目 <論文> ルッカの古代ローマ円形闘技場遺構の住居化に関する研究

論文等審査委員

|          |        |     |        |      |
|----------|--------|-----|--------|------|
| （主査）     | 東京芸術大学 | 助教授 | （美術学部） | 野口昌夫 |
| （論文第1副査） | ”      | 教授  | （ ” ）  | 前野堯  |
| （副査）     | ”      | ”   | （ ” ）  | 藤木忠善 |
| （ ” ）    | ”      | ”   | （ ” ）  | 益子義弘 |
| （ ” ）    | ”      | ”   | （ ” ）  | 坪井善昭 |
| （ ” ）    | ”      | 助教授 | （ ” ）  | 黒川哲郎 |
| （ ” ）    | 法政大学   | 教授  | （工学部）  | 陣内秀信 |

（論文内容の要旨）

イタリア都市に数多く存在する、古代の遺構を再利用してつくられた建物は、都市の長年にわたる形成過程の一部を物的に呈示している。とりわけローマ帝政期の各都市に共通する公共施設であった古代ローマ円形闘技場の遺構は中世以降、要塞、住居、宗教施設、公共施設等の機能を与えられ、再利用されてきた。

このような歴史的堆積によってつくられた建物に関する研究は、建築史的意義のみならず、都市と建築の連続性や人間の建設行為の本質に触れるものであり、今日の建築学全般に大いに資する現代的な意義をもつ。それにも関わらず、イタリア国内でも考古学分野における各建物単体の調査・研究のみが先行し、都市形成史的観点からみた遺構の機能の考察や、建築学的観点からの再利用の手法の実証的分析、再利用の様態と密接に関連する遺構内の不動産の所有形態の考察といった、多角的なアプローチは極めて少なかった。

本研究は円形闘技場遺構の再利用の機能の中でも、特に住居化という現象に着目して、イタリア、トスカーナ州の都市ルッカに残る円形闘技場遺構を研究対象とし、実測調査、史料、文献に基づく詳細な分析から、その住居化の特質を多角的かつ実証的に明らかにすることを目的とする。

第1章「序論」では、研究の背景と意義を示し、本研究の位置付けを明確化した後、研究の目的を提示している。次にイタリア都市における再利用された円形闘技場遺構全40事例を、再利用の機能によって分類し、各機能を時間軸上に整理することにより、再利用の様態の全体像を明らかにしている。さらに本研究の目的から、円形闘技場の特質を良好に残し、再利用の様態が最も明確なルッカの遺構を、詳細な研究の対象として選定している。最後に関連する既往研究を概説

し、研究の構成を示している。

第2章から第5章までを本論とする。第2章では本研究の基底となる、イタリア都市における円形闘技場遺構の住居化の特質を論じている。第3章、第4章、第5章では、本研究の対象であるルッカの遺構に関して論考している。

第2章「イタリア都市における円形闘技場遺構の住居化」では、イタリア全土の住居化事例を対象として、住居化の特質を建築学的、都市形成史的観点から総合的に論じている。まず、建築学的観点から各事例の住居化部分を数量化して比較、対照すると共に、これをイタリアの「建築類型学」*tipologia edilizia*に基づき類型化している。また、住居化の史的背景を考察しつつ、都市形成史的観点から、周辺地区形成過程における遺構の機能を明らかにしている。

第3章「都市形成史的観点からみたルッカの円形闘技場遺構」以降は、研究対象をルッカの事例に限定する。本章では、ルッカの円形闘技場の当初の姿および遺構の都市形成史的観点からみた特質を論じている。始めに、円形闘技場のローマ帝政期の都市における配置と、建物の初源的様態を呈示している。次に、円形闘技場街区の史的形成過程を、中世初期における遺構の要塞化、サン・フレディアーノのボルゴ（市壁外部に形成された新興地）形成との関連、建築家L.ノットリーニによる19世紀の再開発計画を経て現在に至るまで、明確化している。最後に、周辺地区形成過程における遺構の機能を、周辺の道路、街区平面の形成との関係から明らかにしている。

第4章「ルッカの円形闘技場街区を構成する建物単位と遺構の住居化の手法」では、建築学的観点より遺構の住居化の手法を論じている。楕円形平面の1街区を構成する円形闘技場遺構を複数の建築物の複合体とみなし、現地調査による実測図面を基に現在の街区を分節し、建物単位を特定している。次に各建物単位をイタリアの建築類型学に基づき類型化し、考察を加えている。さらに4棟の建物単立について、円形闘技場の復元図と比較・対照して、建物内部の遺構の残存部分およびその内部空間構成における影響を明確化すると共に、各建物単位の平面構成を分析し、遺構の住居化の手法の実態を明らかにしている。最後に、住居化の最終形態であるノットリーニによる再開発計画（1830～38年）における遺構の改変点を明確化している。

第5章「課税用不動産登記台帳（1873年）とノットリーニによる実測平面図（1819年）に基づく19世紀における円形闘技場街区の所有形態」では、遺構の再開発計画（1830～38年）前後における同街区の所有形態の特質を論じている。まず、課税用不動産登記台帳の登記リストと地籍図の精査、再構成によって、1873年における遺構内の不動産の位置と所有の境界を明確化している。次にノットリーニの実測平面図に基づき1819年当時の円形闘技場街区地上階の所有区画を抽出し、これを地籍図から得られる所有区画と比較、対照することによって、再開発計画前後における所有形態の変化を明らかにしている。

第6章「結論」では、各章で得られた結果をまとめ、本研究で得られた知見を総括している。